

・殺菌剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	病害虫名	使用方法	使用時期	使用回数	希釈倍数	魚毒	蚕毒	備考
M4	オーソサイド水和剤80	苗立枯病	散布	発病前～ 発病初期	8回以内	600倍	III		花き類・観葉植物 (ばら、りんどう、 せんにちこう、コス モス、ひまわり、シネ リア、スイピー、みや こわすれ、アンスリウ ム、斑入りアマトコを 除く)
-	(ダゾメット) ガスタード微粒剤	萎凋病 球根腐敗病 根頭がんしゅ 首腐病 白絹病 半身萎凋病 立枯病	本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する	は種又は植付前	1回	20～30kg/10a	III		花き類・観葉植物
-	バスアミド微粒剤	萎凋病 球根腐敗病 根頭がんしゅ 首腐病 白絹病 半身萎凋病 立枯病	本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する	は種又は植付前	1回	20～30kg/10a	III		花き類・観葉植物
NC	カリグリーン	うどんこ病	散布	発病初期	-	800倍	I		花き類・観葉植物 (きくを除く)
10+1	ゲッター水和剤	灰色かび病	散布	-	5回以内	1000倍	I		花き類・観葉植物 (ひまわり、ゼラニウムを除く)
M1	サンヨール	うどんこ病 灰色かび病	散布	発生初期	8回以内	500倍	I		花き類・観葉植物 (きく、ばら、ペチュニア、スタチス、プリムラ、パンジーを除く)
12	セイビアーフロアブル20	灰色かび病	散布	発病前～ 発病初期	4回以内	1000倍	I		花き類・観葉植物 (きんせんか、ホワイトレースフラワーを除く)
1	トップジンM水和剤	菌核病	散布	-	5回以内	1500倍	II		花き類・観葉植物 (トロギキョリを除く)
-	ドロクロール	萎凋病(フザリウム菌) 青枯病 半身萎凋病	土壌くん蒸	-	2回以内(但し、床土は1回以内、圃場は1回以内)	<床土・堆肥>1穴あたり3～6ミリリットル<圃場>1穴あたり2～3ミリリットル	III		花き類・観葉植物
U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	うどんこ病	散布	-	2回以内	2000倍	I		花き類・観葉植物
9	フルピカフロアブル	灰色かび病	散布	発病初期	5回以内	2000～3000倍	I		花き類・観葉植物 (ばら、スタチス、宿根がすみそう、ゆり、りんどうを除く)
M3+1	ホーマイ水和剤	フザリウム・リズクトニア菌による病害(苗立枯病等)	種子処理機による種子粉衣	は種前	1回	種子重量の1.0%	-		花き類
19	ポリオキシシンAL水溶剤	うどんこ病 灰色かび病 黒斑病	散布	発病初期	8回以内	2500倍	I		花き類・観葉植物

FRAC コード	薬剤名	病害虫名	使用方法	使用時期	使用回数	希釈倍数	魚 毒	蚕 毒	備考
M10	モレスタン水和剤	うどんこ病	散布	発病初期	10 回以内	2000 ～ 3000 倍	IV		花き類・観葉植物 (カーネーションを除く)
7	モンカットフロア ブル40	白絹病	株元散布	—	3 回以内	1000 ～ 2000 倍	I	注 意	花き類・観葉植 物
11+4	ユニフォーム粒剤	立枯病 (リゾクトニア菌)	土壌表面 散布	定植時又 は生育期	3 回以内	18kg/10a	I		花き類・観葉植物 (きく、トルコギキ ョウを除く)
14	リゾレックス粉剤	立枯病	土壌混和	定植前	1 回	50kg/10a	I		花き類・観葉植物
	リゾレックス水和 剤	株腐病	土壌灌注	生育期	5 回以内	500 ～ 1000 倍	I		花き類・観葉植物
	リゾレックス水和 剤	茎腐病 立枯病	土壌灌注	生育期	5 回以内	500 ～ 1000 倍	I		花き類・観葉植物

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	病害虫名	使用方法	使用時期	使用回数	希釈倍数	魚 毒	蚕 毒	備考
4	アクタラ粒剤 5	アブラムシ類	株元散布	生育期	1 回	6kg/10a	II	注 意	花き類・観葉植物
	アクタラ顆粒水溶 剤	ハモグリバエ類	散布	発生初期	6 回以内	2000 倍	II	注 意	花き類・観葉植物 (宿根アスター、トルコギ キョウ、きくを除く)
		ミカンキイロアザミウマ				1000 倍			
3	アディオソ乳剤	ヨトウムシ類	散布	発生初期	6 回以内	2000 倍	III	注 意	花き類・観葉植物 (はばたんを除く) 指定農薬
4	アドマイヤーフロ アブル	アブラムシ類	散布	発生初期	5 回以内	2000 倍	I	注 意	花き類・観葉植物 (きくを除く)
6	アフアーム乳剤	ハモグリバエ類	散布	発生初期	5 回以内	1000 倍	I	注 意	花き類・観葉植物
		アザミウマ類				2000 倍			
		ヨトウムシ類				1000 倍			
1	オルトラン粒剤	アザミウマ類	株元散布	発生初期	5 回以内	3～6kg/10a	II		花き類・観葉植物 (きく、宿根スター ス、カーネーション、アリウム、 たであいを除く)
		アブラムシ類				6kg/10a			
		ヨトウムシ類							
	オルトラン水和剤	アザミウマ類	散布	発生初期	5 回以内	1000 ～ 1500 倍	I		花き類・観葉植物
		アブラムシ類							
		ヨトウムシ類				1000 倍			
1	オンコル粒剤 5	アザミウマ類	株元散布	生育期	3 回以内	6kg/10a	III		花き類・観葉植物 (きく、ストックを除く)
13	コテツフロアブル	ハダニ類	散布	発生初期	2 回以内	2000 倍	II		花き類・観葉植物 (きく、ストックを除く)
		ヨトウムシ類							
9	チェス顆粒水和剤	アブラムシ類 コナジラミ類	散布	発生初期	4 回以内	5000 倍	I		花き類・観葉植物
10	ニッソラン水和剤	ハダニ類	散布	—	2 回以内	2000 ～ 3000 倍	I		花き類・観葉植物
15	ノーモルト乳剤	ヨトウムシ類	散布	発生初期	2 回以内	2000 倍	I	注 意	花き類・観葉植物 指定農薬
10	バロックフロアブル	ハダニ類	散布	発生初期	1 回	2000 倍	I	注 意	花き類・観葉植物 指定農薬
21	ピラニカEW	ハダニ類	散布	発生初期	1 回	2000 倍	II		花き類・観葉植物 (カーネーション、きくを 除く)
4	ベストガード水溶 剤	コナジラミ類	散布	発生初期	4 回以内	1000 倍	I		花き類・観葉植物 (ばら、きくを除く)
	ベストガード粒剤	アブラムシ類	生育期 株元散布	発生初期	4 回以内	1～2g/株			花き類・観葉植物 (きく、きんせん かを除く)
1	マラソン乳剤	アブラムシ類	散布	発生初期	6 回以内	2000 ～ 3000 倍	I		花き類・観葉植物

IRAC コード	薬剤名	病害虫名	使用方法	使用時期	使用回数	希釈倍数	魚 毒	蚕 毒	備考
4	モスピラン顆粒水 溶剤	アブラムシ類	散布	発生初期	5回以内	2000～4000 倍	I	注意	花き類・観葉植物 (ストック、りんどう を除く)
7	ラノータープ	コナジラミ類	作物体の 付近に設 置する	栽培期間 中	1回	50平方メー トル/10a		注意	花き類・観葉植物 (施設栽培) 指定農薬
3	ロディー乳剤	アブラムシ類	散布	—	6回以内	1000倍	III	注意	花き類・観葉植物 指定農薬
—	粘着くん液剤	ハダニ類	散布	発生初期	—	100倍	I		花き類・観葉植物

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 被害は、すべての品目に確認できていないので使用に際しては十分留意する。

22. 除湿機を利用する場合の注意事項

- (1) 予防や少発生時の利用は高い防除効果が期待できるが、病原菌は枯死茎葉等に常に生存しており、発病を認めたら薬剤防除を併用する。
- (2) 花梗部の発病抑制効果は高いが、立枯性の発病に対する効果はやや劣るので、薬剤防除は株元を中心に行う。
- (3) 薬剤散布回数の削減目安としては概ね 50%以下とする。
- (4) 作物の存在下での除湿は数%から 10%程度の湿度低下にとどまる。極端に設定湿度を下げて経費がかかるだけで大きな効果は望めないで、結露しない程度とする。
- (5) 導入する除湿機は施設の大きさに応じて選択するが、おおよその目安は、300～500 m²の面積に対し、3馬力（1馬力＝735.5W）の除湿機 1 台である。
- (6) 季節的な使用法として、冬季は夜間暖房時前から換気までと、曇雨天日の日中に連続して使用する。春、秋は夜間及び日中の無換気時に使用し、曇雨天日には連続運転する。初夏、梅雨時は曇雨天日の日中及び夜間に連続運転する。なお、夜間は冷却装置を持つ場合のみとする。

23. ボトキラー水和剤のダクト内投入処理をする場合の注意事項

- (1) 本剤はバチルス菌（細菌）を有効成分とする生物農薬であり、このバチルス菌が植物体上に定着し病原菌の棲みかとなし栄養を競合することにより防除効果を発揮する。そのため、本剤は発病前からの処理により植物体への定着を促す必要がある。
- (2) 本剤の有効成分（バチルス菌）はキノコ栽培において、ストップ症状（キノコ菌糸の蔓延阻害）を引き起こす恐れがあるため、施設外へ流出しないように注意する。
- (3) 本剤の処理だけに偏重せず、過湿にならない栽培管理、定期的な葉かきの実施、花がら・古葉の除去など耕種的防除を励行し、灰色かび病が発生しない環境を整えるのが前提である。
- (4) 有効成分に影響を与える恐れがあるため、キャプタン、マンゼブ、TPN、プロピネブ、ストレプトマイシン剤とは併用しない。
- (5) 本処理を行うに当たり、あらかじめ上記以外の灰色かび病防除薬剤を散布して、ハウス内の灰色かび病密度を下げておくこと効果的である。また、発病後は化学殺菌剤を併用し防除を行う。
- (6) 本剤のダクト内投入処理にあたっては以下の点に留意する。
 - ・暖房機などが数時間以上運転される条件下で使用する。
 - ・暖房機が故障することがあるので、暖房機の吸気口からは絶対に投入しない。
 - ・散布中はハウス内に入らない。散布後は十分な換気を行ってからハウス内に立ち入る。
 - ・飛散状況を把握するため、散布後は以下の点を確認する。不備があった場合にはダクトや投入口の設置状況を改善し、良好に飛散するようにする。
 - ・散布後は投入口付近に薬剤が残っていないか、ダクト内に薬剤がたまっていないか、結露や灌水により、ダクト内で薬剤が吸湿し固化していないか、内張の被覆ビニールの外側にダクトが移動していないか確認する。
 - ・可能であれば細菌用普通寒天培地を一晩暴露し、飛散状況を確認する。

24. 花き類の総括注意

(1) 蚕、魚に対する注意

- ・合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒が、I G R剤（アプロードを除く）、B T剤（生菌）は蚕毒が極めて強く、使用地域の指定があるのでこれ以外では使用しない（特別指導事項参照）。
- ・アクタラ、アドマイヤー、アフーム、コロマイト、ジアミド剤、スタークル、スピノエース、ダントツ、パダン、ハチハチ、バロック、プレオ、モスピランは蚕毒が特に強いので桑園付近で使用しない（特別指導事項参照）。
- ・アミスター、ゲッター、モレスタン、モンカット、コテツ、サンマイト、スミチオン、ダニトロン、トアローは蚕毒が強いので注意する。
- ・オキシンドー、オーソサイド、キノンドー、ダコニール、チオノック、トレノックス、ドロクロール、バスアミド、フロンサイド、ベンレートT、モレスタン、オンコル、サンマイト、スミチオン、ダニトロン、パダンは魚毒が強いので注意する。
- ・コルト、フェニックスは水産動物（特に甲殻類）、パダンは水産動植物（魚類、甲殻類、ドジョウ、藻類）に影響が強いので注意する。